

第七章 大君の物語 大君の死と薫の悲嘆

[第一段 大君、もの隠れゆくように死す]

「つひにうち捨てたまひなば(あなたが亡くなって私をお見捨てなさるなら)、世にしばしもとまるべきにもあらず(私もこの世に少しも留まってはられない)。命もし限りありてとまるべうとも(寿命があつて生き延びるにしても)、深き山にさすらへなむとす(出家遁世して、山深く籠もります)。ただ、いと心苦しうて(ただとても気懸かりで)、とまりたまはむ御ことをなむ思ひきこゆる(後にお残りになる妹君の御事情を心配申します)」

と、いらへさせたまつらむとて(と中納言は姉姫に応えさせて声をお聞かせ頂こうと)、かの御ことをかけたまへば(懸案の妹君と兵部卿宮との話題を持ち出しなされると)、顔隠したまへる御袖を少しひき直して(姉君は顔を隠していらした御袖を少し下げて)、

「かく、はかなかりけるものを(このように短命で終わる私を)、思ひ隈なきやうに思されたりつるもかひなければ(無闇にあなたを避け続ける偏屈者とお思いになるのも不本意だったので)、このとまりたまはむ人を(後に残る妹を)、同じこと思ひきこえたまへと(私の代わりに私同様に思って頂きたいと)、*ほのめかしきこえしに(妹を置き去りにした事でお示し申しましたが)、違へたまはざらましかば(その通りにして下さいましたら)、うしろやすからましと(安心できたのにと)、これのみなむ恨めしきふしにて(このことだけが心残りに)、とまりぬべうおぼえはべる(今でも思っています)」 *「ほのめかしきこえし」は、姉君が妹を身代わりに寝所を抜け出た時のこと、を言っているらしい。そして、この事を話題にすることが、この分かり難い言い回しの核心なのだろう。しかし、自分の代わりに妹を、は姉君の本音ではない。そうするしかなかったのは、最初の夜に中納言が姫を抱かなかった事で、姫は追い詰められていたからであり、それこそが姫の中納言への恨みそのものだ。が、そうは言えないし、そうは言えない女心は、中納言には何処までも分からないらしい。それでも、姫は最後までこの事を中納言に訴えずには居られない。それに実際、もし中納言が姫を抱いていれば、姫が結局は短命に終わったとしても、中納言の妻としての立場はそれなりに築けていた筈であり、であれば、妹君の兵部卿宮との結婚も、正妻の地位は無理にしても、それなりの待遇は期待できたのであり、全体の様相は全く違っていたことだろう。そんな有り触れた平坦な話では物語の素材にはならないのかも知れないが、それでも描こうとすればいくらかも機微はあるだろうし、深い情緒表現も可能だろうし、本編にはそういう日常の文化が多く語られていたようにも思う。だがしかし、事実は小説よりも奇なり、で、こういう変な展開の方がむしろ真相に近いということも、また十分に有り得る。

とのたまへば(と仰ると)、

「かくいみじう、もの思ふべき身にやありけむ(私はこんなに深く思い悩まねばならない運命なのだろうか)。いかにも(最初の夜も)、いかにも(身代わりの夜も)、*異ざまにこの世を思ひかかづらふ方のはべらざりつれば(私には他に現世での自分の恋情を示す方法が無かったので)、御おもむけに従ひきこえずなりにし(あなたの御意向に添い申せなかったのです)。今なむ、悔しく心苦しうもおぼゆる(今さらながら残念で申し訳なく思います)。されども(しかし妹君のことは御後見申しますので)、うしろめたくな思ひきこえたまひそ(ご心配なさいませぬように)」 *「異ざまにこの世を思ひかかづらふ方のはべらざりつれば」は、姫にはくあなた以外と結婚することは考えられなかった

ので>と聞こえただろうし、「いかにもいかにも」は<どうしても>くらいの強調で、それが姫に対する誠意でもあるだろう。が、薫君は本当に女心が分からないのか。有り得ないだろう。姫の悲しみは分かっていた。が、自分の呪われた出生を思うと、自分の意志に加えて抗し切れない力に後押ししてもらわなければ、遊びとは違って子作りの為の家を構える結婚までは決心できない、という重い事情が薫君には押し掛かっていた。そして、その抗し切れない力は、もうすぐ止むを得ないしがらみとして姉君も納得する時期が近付いていた、と薫君は読んで三条宮邸を整備したのだろう。しかし、人生にこだわっていたのは薫君だけではない。姉君にも没落王家の誇りという奇妙な重荷が課せられていた。そして、押し潰された。此処の文はその読み方を破綻させない書き方になっていると思われるので、薫君は今こそ全ての思いを吐露した、と私は読んで置きたい。

などこしらへて(など中納言は宥めて)、いと苦しげにしたまへば(姫がとても苦しうになさっている)、*修法の阿闍梨ども召し入れさせ(護摩焚きの阿闍梨たちを呼び入れなさせて)、さまざまに*験ある限りして(いろいろな靈験実績のある僧たちばかりで)、加持参らせさせたまふ(加持祈禱を念じさせなさいます)。我も仏を念ぜさせたまふこと、限りなし(中納言自身も念仏を唱えなさいること、に集中します)。 *「修法(しゅほふ)」は<仏の慈悲を乞い護摩を焚いて印を結び真言呪文を念じる祈禱法>とのこと。 *「験ある限り(げんあるかぎり)」は<効験を表した僧ばかり>。

「世の中を*ことさらに厭ひ離れね(不貞の子という自身が背負った悪い因縁を立つために、男女の縁は特に敬遠せよ)、と勧めたまふ仏などの(とお勧めになる仏などが)、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ(これほどまでの苦難を私に与えなされるのかも知れない)。見るままに*もの隠れゆくやうにて*消え果てたまひぬるは(見る間に物が消えてゆくように姫がお亡くなりになってしまったのは)、*いみじきわざかな(思いの外の早さだった)」 *「ことさらに」は<特に自分の場合は>で、薫君は自身の出生の忌まわしさが念頭にあったのだろう。 *「もの隠れゆく」は注に<「物」かれゆく> 御池肖三 河内本と別本の横山本は「かくれ」(隠)とある。『集成』『完訳』は「ものの枯れゆく」と校訂。>とある。「ものの枯れゆく」は分かり易いが、絵として姫らしくないので、紛らわしい言い方になるが<ものが消える>と読んで置く。 *「消え果てたまひぬる」は<姫が亡くなってしまった>で、驚くほどあっけなく語られる。 *「いみじ」は<非常に悲しい>ではありそうだが、悲しさや辛さは既に何度も訴えているので、此処では「見るままにもの隠れゆくやうにて」の<意外な早さ>が印象的だった、と読んで置く。

引きとどむべき方なく(姫を引き留める事が出来なかった無力感に)、足摺りもしつべく(薫君は足を引きずって歩くほどで)、人のかたくなしと見むこともおぼえず(人が見つともないと思うのも気になりません)。限りと見たてまつりたまひて(姫のご臨終と拝し申し上げなさせて)、中の宮の、後れじと思ひ感ひたまふさまもことわりなり(妹君が後を追うと取り乱しなされるのも無理がない)。あるにもあらず見えたまふを(動転して気もそぞろに見えなされる妹君を)、例の、さかしき女ばら(例によって小賢しい女房たちは)、「今は、いとゆゆしきこと(亡骸は不浄でございます)」と、引き避けたてまつる(と引き離し申します)。

[第二段 大君の火葬と薫の忌籠もり]

中納言の君は、さりとて、いとかかることあらじ、夢か、と思して、御殿油を近うかかげて見たてまつりたまふに(中納言の薫君はいくらなんでもこんなあっけないはずはない、是は夢かとお思いになって御部屋灯を姫の近くに寄せて照らして拝し申しなされると)、隠したまふ顔も、た

だ寝たまへるやうにて、変はりたまへるところもなく、うつくしげにてうち臥したまへるを(袖で隠しなされた顔もただ寝ていらっしゃるようで、何もお変わりになったところもなく、可愛らしく臥していらっしゃるのを)、「かくながら、虫の殻のやうにても見るわざならましかば(このまま虫の抜け殻のように変わらぬ形で見ている事が出来たなら)」と、思ひ惑はる(と変な事をお考えになります)。

*今はの事どもするに(御遺体のお清めに)、*御髪をかきやるに(女房たちが姫の御髪を掻き揃えと)、さとうち匂ひたる、ただありしながらの匂ひに(さっと匂立つ生前同様の匂ひに)、なつかしう香ばしきも(懐かしく嗅がれるのも)、*「いまはの事どもするに」は注に<主語は女房たち。死後の処置。>とある。*「みぐしかきやるに」は注に<主語は女房たち。大君の髪を。>とある。

「ありがたう(世にも稀な)、何ごとにてこの人を(どうしてこの人を)、すこしもなのめなりしと思ひさまさむ(決して普通の人だったと思ひ鎮められようか)。*まことに世の中を思ひ捨て果つるしるべならば(この死別が本当に男女の縁を諦めるべき仏の御諭しならば)、*恐ろしげに憂きことの(恐ろしさを覚える厭な事で)、悲しさも冷めぬべきふしをだに見つけさせたまへ(悲しさも忘れるような場面まで見せ付けて欲しい)」*「まことに世の中を思ひ捨て果つるしるべならば」は、上にこの死別を「世の中をことさらに厭ひ離れぬ、と勧めたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ」と考えた事を受けての言い方で、「世の中」は忌まわしい出生の薫君が子供を設けかねない<男女の縁>だ。*「恐ろしげに憂きこと」は<姫が物の怪に取り付かれて死に際に目を剥いた断末魔の形相を見せる>みたいなことなのだろう。しかし、「悲しさも冷めぬべきふし」は遺体が腐乱して行くまで見届ければ厭でも目の当たりにするのではないか。むしろ、火葬はその惨さを目晦ましするまやかしかも知れない。たとえ、どんな尊い人も腐乱して土に帰るまで放置されたなら、カラスの死骸と同様の強烈な腐敗臭を放っては、やがて肉組織が崩壊し白骨化し、遂には土に戻るので、生前の姿はほんの一時の変化だったと、観察者は仏法の教えにもあるような達観に至るだろう。しかし、他のもの同様に土に戻る同じ物質が、一時的であっても、同様の一時的な存在である観察者に、偉大な感動を与えたという廻り合わせこそが<縁>だとすれば、物質を最期まで見届けることこそが、其処に<縁があった>事の尊さを実感できるような気もする。が、同じ物質であってみれば、遺体は皆同じ末路を辿るので、各個体の死後の話は省略できる、というのが今日の社会の方便なのだろう。やはり、死に際であっても、生前の姿が醜い、ということが肝心のようだ。しかし、百年の恋も冷める、という言い方もあるが、百年の恋、もあるのだから、人の生死はその有機体性だけでは語れない。が、電子情報だけでは、やはり意味がない。無限ループも結局は質量が限度だが、何も最後まで付き合う必要もなく、気分が落ち着くような、物の言い方が見つかれば、その場を離れることはできる。結局、当人にとってはいつも、自分が恋しているか冷めているか、が問題なわけだ。

と仏を念じたまへど(と仏に願いなさるが)、いとど思ひのどめむ方なくのみあれば(ますます気持ちは高ぶるばかりなので)、言ふかひなくてひたぶるに(どう言ってみても生き返るはずも無いと結論を急いで)、「煙にだになし果ててむ(いっそ煙にして終えよう)」と思ほして(とお思いになって)、とかく例の作法どもするぞ(火葬の準備に掛かるのですが)、あさましかりける(何とも遣り切れません)。

空を歩むやうにただよひつつ(中納言は空を歩くように漂いながら)、限りのありさまさへはかなげにて(御臨終さえ力無く)、煙も多くむすぼほれたまはずなりぬるもあへなしと(茶毘の煙も

多く棚引きなさらなかったのも頼りないと)、あきれて帰りたまひぬ(姫の死をあっけなく思っ
て山荘にお戻りなさいました)。

*御忌に籠もれる人数多くて(山荘では中納言の忌中謹慎に従う者が多く居て)、*心細さはすこ
し紛れぬべけれど(女房たちの心細さは少し紛れたたようだが)、中の宮は、*人の見思はむこと
も恥づかしき身の心憂さを思ひ沈みたまひて、また亡き人に見えたまふ(妹君は匂宮から捨てら
れた女のように見えるという傍目にも気が引ける事情を嫌気なさって、もう一人の故人のよう
に見えなさいます)。*「おおんいみにこもれるひとかずおほくて」は注に<『集成』は「期間は三十日。薫が
いるので人数が多いのである」と注す。>とある。*「心細さは少し紛れぬ」は注に<主語は女房たち。>とある。*
「人の見思はむことも恥づかしき身の心憂さ」は注に<『集成』は「匂宮に捨てられたと思って、大君がそれを苦に
亡くなられたからである」と注す。>とある。が、主旨が分からない注だ。匂宮の不参と姉君の死とは、妹君にと
ってこそは拘りとなる点だろうが、傍目にはむしろ分かり難い事情だ。ざっと引いて見れば、妹君は可哀相な人と
思われるだろう。昨年に父宮を亡くし、今回は姉君を失った。と、此処までは同情されるはずだ。で、その上に、
今をときめく三の宮に見初められて幸運と思われたが、此処に来て不参が続き、遊ばれた格好になってしまった。
と、是は不幸のようでもあるが、妬まれる要素もあって、丸々同情を買うと言うよりは、少なからず笑いものにさ
れるだろう。つまり、この捨てられたように見える点こそが、宇治姫自身も気懸かりだし、「人の見思はむことも」
<「恥づかし」=極まりが悪い>という共通項事情だ。

宮よりも御弔らひいとしげくたてまつれたまふ(兵部卿宮からも宇治姫に御見舞をととも頻繁
に差し上げなさいます)。思はずにつくづくと思ひきこえたまへりしけしきも(存外につくづく情
けない方と匂宮を思い申していらっしゃった姉君のお考えも)、思し直らでやみぬるを思すに(取
り成せないままで終わってしまった事をお思いになると)、いと憂き人の御ゆかりなり(妹君には
真に忌まわしい匂宮との御宿縁なのでした)。

中納言、かく世のいと心憂くおぼゆるついでに、本意遂げむと思さるれど(中納言はこのよう
に現世がととも辛く思われる機会に出家してしまおうとお思いになるが)、三条の宮の思されむ
ことに憚り(母入道宮の悲しまれる事に気兼ねし)、この君の御ことの心苦しさとに思ひ乱れて
(この妹君の御事情の不都合さとに思い乱れて)、

「*かののたまひしやうにて(姉姫が仰ったように)、形見にも見るべかりけるものを(妹君を姉
の身代わりにでも娶ればよかったものを)。下の心は(本心では)、身を分けたまへりとも(身を分
けた姉妹と言っても)、移ろふべくもおぼえ給へざりしを(妹君に心が移ることはなかったが)、
かうもの思はせたてまつるよりは(匂宮の薄情で、妹君をこのようにもの思いさせ申し上げるよ
りは)、ただうち語らひて(とにかく親しく交わって)、尽きせぬ慰めにも見たてまつり*通はまし
ものを(姉君を失った尽きない慰めとして妹君をお抱き申して情に通じれば同根の懐かしさを味
わう事が出来たものを)」*「かののたまひしやうにて」は注に<以下「通はましものを」まで、薫の心中。『完
訳』は「大君の思惑どおり大君の形見としてでも中の君と結ばれるべきだった、とする。「形見」の語に注意。薫
には、大君あってこそその中の君である」と注す。>とある。*「かよはまし」は妹君と共に姉君を懐かしむことが
できる、という言い方ではありそうだが、「慰めにも見たてまつり」は<慰み物として妹を抱く>とい語感なので、「身
を分けたまへりとも」を受けた肉体の実感を示してもいるのだろう。結局、薫君は八宮の娘の味を知ることはなかつ
たのであり、多分この事の意味は大きい。

など思す(などとお思いになります)。

かりそめに京にも出でたまはず(この御忌中は一時さえ京にはお出向きなさらず)、かき絶え(一切お手紙での消息もなく)、慰む方なくて籠もりおはするを(落ち込んだまま山荘に籠もっていらっしゃるのを)、世人も、おろかならず思ひたまへること、と見聞きて(都の人々も、中納言殿は本当に宇治の姫に入れ込んでいらっしゃった、と伝え知って)、内裏よりはじめてたてまつりて、御弔ひ多かり(帝を初め申し上げて、御見舞は多くありました)。

[第三段 七日毎の法事と薫の悲嘆]

はかなくて日ごろは過ぎゆく(むなしく日にちは過ぎてゆく)。七日七日の事ども、いと尊くせさせたまひつつ、おろかならず孝じたまへど(薫君は七日ごとの追善読経をととても大事に上げさせなさいつつ手厚く供養なされたが)、*限りあれば(作法の決まりがあるので)、御衣の色の変らぬを(喪服姿には成れないのを)、*かの御方の心寄せわきたりし人びとの(故姉君の部屋付きの忠誠を分かち合っていた女房たちが)、いと黒く着替へたるを、ほの見たまふも(とても黒い喪服姿でいるのを、ふと御覧になると)、 *「限りあれば」は注にく『完訳』は「薫と大君は近親者でも夫婦でもないで薫は喪服を着られない」と注す。>とある。 *「かのおおんかた」は<故姉姫体制=部屋女房たち>。

「くれなゐに落つる涙もかひなきは、形見の色を染めぬなりけり」(和歌 47-27)

「血縁は 涙溜めても 結べない」(意識 47-27)

*「くれなゐに落つる涙」は、何処かに漢文出典があるらしい「紅涙(こうるい、血の涙。悲嘆にくれて流す涙をいう。)」という語の訓読みであるらしい。と同時に、「くれなゐ」は<紅色の着物>を意味し、それは<「形見の色」=喪服の黒>とは違う、だから泣いた甲斐がない、という歌筋のようだ。

*聴し色の氷解けぬかと思ゆるを(薄紅色の上着にいつまでも姉姫への思いが固く涙が乾かないように見える中納言が)、いとど濡らし添へつつ眺めたまふさま(こう独詠なさっては、いっそう悔し涙を添えてもの思いに沈んでいらっしゃる姿は)、いとなまめかしくきよげなり(とても優美できれいでした)。 *「聴し色(ゆるしいろ)」は<平安時代、だれでも着用を許された衣服の色。紅色・紫色の淡い色など。ゆるしいろ。>と大辞泉にある。「聴(ちょう・きく)」には<聞き入れる→許す>という意味があるらしい。注には<『完訳』は「ここは薄紅色。直衣の色目。それが涙で凍りついたように光る」と注す。>とある。が、「氷解けぬかと思ゆる」は下歌でもありそうな言い回しだし、「涙で凍りついたように光る」ののだとしても、それを此处で言う意図が分からない。歌では「くれなゐに落つる涙」と情熱的な表現があったばかりなので、「氷解けぬ」という言い方には、何か特別な意図がなければ違和感がある。が、それが何かは私には分からない。で、「氷解けぬ」を、それだけ取り出した語感は<いつまでも緩まない悲しみ>であり<いつまでも乾かない涙>あたりなので、取り敢えずはその線で言い換えて置く。

人びと覗きつつ見たてまつりて(女房たちがその中納言殿を覗き見てはお気持ちを押し申しして)、

「言ふかひなき御ことをばさるものにて(亡くなってしまったのだから御姉君のことは仕方が無いとして)、この殿のかくならひたてまつりて(中納言殿をこのように親しく取り成し申し上げて)、今はとよそに思ひきこえむこそ(今後は縁の無い人と思い申し上げるのは)、あたらしく口惜しけれ(勿体無く惜しめます)」

「思ひの外なる御宿世にもおはしけるかな(思いの外に深い御縁でいらっしやいました)。かく深き御心のほどを(このように厚い殿のお気持ち)、かたがたに背かせたまへるよ(御姉妹のそれぞれが拒みなさったとは)」

と泣きあへり(と泣き合っていました)。この御方には(この妹君の御社中には)、

「昔の御形見に(故姉君に繋がる親しみを思い申して)、今は何ごとも聞こえ、承らむとなむ思ひたまふる(今後はどんなことでも相談申し、承ろうと存じます)。疎々しく思し隔つな(疎遠になさいませぬように)」

と聞こえたまへど(と中納言は申し上げなされたが)、「よろづのこと憂き身なりけり(全てに於いて自分は不幸だ)」と、もののみつつましくて(と妹君はすっかり引き籠もって)、まだ対面してもものなど聞こえたまはず(まだ対面してのお話しはなさいませぬ)。

「この君は、けぎやかなるかたに、いますこし子めき、気高くおはするものから(この妹君は華やかな点では姉君より無邪気で澄ましているが)、なつかしく匂ひある心ざまぞ、劣りたまへりける(しつとりと落ち着いた情緒に於いては劣っている)」

と、事に触れておぼゆ(と薫君は事に触れて思います)。

[第四段 雪の降る日、薫、大君を思う]

雪のかきくらし降る日(雪が空を搔き暮らして降る日)、ひねもすにながめ暮らして(一日中もの思いに沈んで)、世の人のすさまじきことに言ふなる師走の月夜の(世の人が面白味が無いと言うところの十二月の月夜が)、曇りなくさし出でたるを(雲のない空に差し出てきたのを)、簾巻き上げて見たまへば(薫君が簾を巻き上げて御覧になると)、*向かひの寺の鐘の声、枕をそばだてて、今日も暮れぬと、かすかなる響を聞きて(ちょうど白楽天の左遷された時の閑所の詩のように、向かいの寺の鐘の声を枕も上げぬまま今日も一日過ぎてしまったと、宇治山荘に遠く響くのを聞いて)、*「向かひの寺の鐘の声～」は注に<『源氏積』は「山寺の入相の鐘の声ごとに今日もくれぬと聞くぞ悲しき」(拾遺集哀傷、一三二九、読人しらず)、>とある。以前にも引かれた白居易の漢詩「香炉峯下」は、左遷の不遇に遭いながらも、その閑居の平穏な暮らしに、一方では素直な安堵感を覚える、という静と動が微妙に響くような趣で、今の薫君の心境をこの心象風景に準えた表現、ということらしい。

「おくれじと空ゆく月を慕ふかな、つひに住むべきこの世ならねば」(和歌 47-28)

「後れじと 澄むべき月を 慕ふかな」(意識 47-28)

*注に<薫の故大君を慕う独詠歌、第二首目。「澄む」に「住む」を掛ける。「澄む」は「月」の縁語。>とある。「空行く月」は、空に澄んで見える月を姉君に例えたのだろうが、姉君が成仏できない父宮を追いたいと言っていた所為か、私には冥界を彷徨うように聞こえて、何処か不吉な印象だ。

風のいと烈しければ、薨下ろさせたまふに(風がとても激しく吹くので、殿は女房に薨戸を下ろさせなされたが)、四方の山の鏡と見ゆる*汀の氷、月影にいとおもしろし(外の庭では四方の山々が鏡のように映って見える池の氷が月影にとても風情があります)。「京の家の限りなくと磨くも、えかうはあらぬはや(京の家の庭をどんなに磨き上げても、とてもこうはならない)」とおぼゆ(と思えます)。「わづかに*生き出でてものしたまはましかば(少しでも持ち直していらっしやれば)、もろともに聞こえまし(この風情を共に愛で申せたのに)」と思ひつづくぞ(と薫君には姉君が思い続けられて)、胸よりあまる心地する(泣きたくなります)。 *「みぎはこのほり」には、第一首の添え詞の「聴し色の氷解けぬかと思ゆるを」に通じる意味が込められていて、単なる風景描写ではない気がするが、それが何を意味するかは分からない。 *「生き出づ(いきいづ)」は<生き返る。よみがえる。>と古語辞典にあるが、大辞泉には<生き返る。息を吹き返す。>の他に<正気に返る。元気を回復する。>という語用も例示されていて、まだ死後一月未満の現在であれば、「わづかに」は<一時的にでも>という架空設定ではなく<もう少し>という無念さとして置きたい。

「恋ひわびて死ぬる薬のゆかしきに、雪の山にや跡を消なまし」(和歌 47-29)

「分け入って いっそ消えたい 雪の山」(意識 47-29)

*注に<薫の故大君を慕う独詠歌、第三首目。『完訳』は「『竹取物語』の帝が、かぐや姫昇天後、ひとり長寿を保つ孤独の苦しみを思い、不死の薬を焼かせたのと、同じ発想であろう。薫の、大君に抱く絶望的な愛執に注意」と指摘。>とある。「雪の山」はインドの<雪山(せつせん)=ヒマラヤ>を言う言い方でもあるらしい。秘境ヒマラヤは薬草の宝庫と考えられてもいて、中には毒薬もあるだろう、ということらしい。池の氷に映った山々の姿から得た歌詠みらしいが、今いちフリの食い込みが足りなくて、ヒマラヤの持ち出しに強引さを感じる。

「*半ばなる偈教へむ鬼もがな(尊い言葉を半分教える鬼に会えたら)、ことつけて身も投げむ(残りを聞きたいといって身を投げよう)」と思すぞ(と中納言が歌に添えてお思いになるのは)、心ぎたなき*聖心なりける(真言ではなく死が目的なので、不純な求道心なのでした)。 *「半ばなる偈教へむ鬼(なかばなるげをしへむおに)」は注に<『大般涅槃経』第十四他の雪山童子の話を引き。>とある。「大般涅槃経(だいはつねはんぎやう)」は釈迦の生前の逸話からなる経典らしく、「雪山童子(せつせんどうじ)」も釈迦がヒマラヤで修行した時の話らしい。帝釈天が釈迦を試す為に、鬼の姿になって有難い真言の半分を聞かせて(半ばなる偈教へむ鬼)、残りの半分を聞きたいならお前を食わせろと迫ったら、釈迦は承知して残り半分を聞いて、その有難い真言を近くの石などに刻んで書き残してから、鬼に食われようと身を投げたところ、鬼は帝釈天の姿に戻って釈迦を敬った、みたいな話らしいと幾つかのウェブサイトから知れた。で、その有難い真言だが、是も雪山偈(せつせんげ)という有名な文言で、漢字訳文は「諸行無常(しょぎょうむじょう) 是生滅法(ぜしょうめつぼう) 生滅滅已(しょうめつめつ) 寂滅為楽(じゃくめついらく)」とあり、是は無常偈という仏教の根本原理である、とも説明されているページを多く見た。で、この文言の和訳が有名ないろは歌で、「色は匂へと散りぬるを(諸行無常) 我が世誰れそ常ならむ(是生滅法) 有為の奥山今日越えて(生滅滅已) 浅き夢見し酔ひもせず(寂滅為楽)」と、七・五の音韻四行に同じ仮名を重ねない、という離れ業を誰かが工夫したらしい。名作大喜利だ。さて、「雪の山」から「雪山童

子」に繋がる、というのは無理の無い展開だが、話展開の運びからして、是はどうもオチになっている言い回しのよ
うに聞こえてならない。が、それにしてもフリが良く見えない。気になるのは、やはり「聴し色の氷解けぬかと思
ゆるを」の「氷解けぬ」の唐突さだ。第一首の「くれなゐ」は<呉国の藍>なので、何か呉国の逸話なりに「氷解けぬ」のフ
リがあって、それが仏法絡みの特に釈迦の逸話に因んだものだったりすれば、此処の「雪山童子」の話に「ことつけて
身も投げむ」という言い方が、上手いオチになりそう。文意上からは、この辺の文に何か施政者に都合が悪い記事
があって隠蔽工作が必要な箇所だったようにも見えないので脱稿があるのだろうか。それとも、当時の常識が今に
伝わり損ねているのか。とにかく、何か私には見えていない。*「聖心(ひじりごころ)」は<向学心>でもあるが
<修学知識>でもあって、「心ぎたなき聖心」は如何にも矛盾した軽口だ。

人びと近く呼び出でたまひて(女房たちを近くに呼び出しなさって)、*物語などせさせたまふ
けはひなどの(近況の話などをさせてお聞きになっている中納言の様子)、いとあらまほしくの
どやかに心深きを(とても立派で落ち着いて思い遣りがあるのを)、見たてまつる人びと、若きは、
心にしめてめでたしと思ひたてまつる(押し申す女房たちの若い者は身に沁みて素晴らしく思い
申します)。老いたるは、ただ口惜しくいみじきことを、いとど思ふ(年配の女房は姉姫の死を、
ただ残念で悲しいと、改めて思います)。*「ものがたり」は主に姉君の思い出話に成りそうな気がするが、
敢えて「ものがたり」と言うのは、取り留めのない話、最近の女房たちの話題に触れる、ようなことなのだろう。こ
ういう、ちょっとした分かり難さが重なると、どんどん焦点がぼけてくる。

「御心地の重くならせたまひしことも(姉姫のご容態が重くお成りになったのも)、ただこの宮
の御ことを(偏に妹君を我がものとなさった兵部卿宮を)、思はずに見たてまつりたまひて(意外
な薄情者と思ひ申し上げなさって)、人笑へにいみじと思すめりしを(妹君が物笑いになる事を無
念にお思いだったようなのを)、さすがにかの御方には(さすがに御方様の妹君には)、かく思ふ
と知られたてまつらじと(そう思っていることをお知り頂くまいと)、ただ御心一つに世を恨みた
まふめりしほどに(ただ姉君の胸一つで世情を怨みなさっていらっしゃったであろう所為で)、は
かなき御くだものをも聞こしめし触れず(ちょっとした果物さえ御召し上がらず)、ただ弱りにな
む弱らせたまふめりし(ただ弱りに弱りなさったのでしょう)。

上べには、何ばかりことごとくもの深げにももてなさせたまはで(表面には少しも大袈裟で
深刻そうにはなさらずに)、下の御心の限りなく、何事も思すめりしに(内心では限り無くご心配
なさって)、故宮の御戒めにさへ違ひぬることと(故宮の御遺言にまで背いてしまったと)、あい
なう人の御上を思し悩みそめしなり(不幸な妹君のご事情を思い悩み込んでいらしたようです)」

と*聞こえて(と弁が申し上げて)、折々のたまひしことなど語り出でつつ(様々な時々に姉君が
仰ったことなどを語り出しつつ)、誰も誰も泣き惑ふこと尽きせず(誰もが泣き暮れ続けます)。
*「聞こえて」の主語は<弁。>と注にある。

[第五段 句宮、雪の中、宇治へ弔問]

「わが心から、あぢきなきことを思はせたまつりけむこと(自分の所為で姉君に余計な心配
をお掛け申してしまったものだ)」と取り返さまほしく(と償いたく)、なべての世もつらきに(あ
らゆる事情が悪いので)、念誦をいとどあはれにしたまひて(ひたすら自ら読経して仏の救いをい

っそう熱心に願いなさって)、まどろむほどなく明かしたまふに(薫君は一睡もせず夜を明かしな
さったが)、まだ夜深きほどの雪のけはひ、いと寒げなるに(まだ暗い時分の雪が積もってとても
寒そうな中に)、人びと声あまたして(来訪を告げる人々の声が多くあって)、馬の音聞こゆ(馬の
足音が聞こえます)。

「何人かは、かかるさ夜中に雪を分くべき(誰がこんな夜中に雪を掻き分けて来たのだろう)」

と、*大徳たちも驚き思へはべるに(と忌籠もりの僧たちも驚き思っていると)、宮、狩の御衣
にいたうやつれて(兵部卿宮が狩衣装束に身をやつして)、濡れ濡れ入りたまへるなりけり(濡れ
たまま邸内に上がっていらっしやったのでした)。 *「大徳(だいとこ)」は<仏のこと。また、高德の僧。
転じて、一般に、僧。>と大辞泉にある。此处では<忌籠もりしている僧侶たち>らしい。

うちたたきたまふさま(戸を打ち叩きなさるのは)、さななり(匂宮に違いない)、と聞きたまひ
て、中納言は、隠ろへたる方に入りたまひて、忍びておはす(とお聞きになって中納言は奥の部
屋にお入りになって隠れていらっしやいます)。

御忌は日数残りたりけれど(忌明けには日があったが)、心もとなく思しわびて(匂宮は妹姫が
心配で我慢できず)、夜一夜(夜通し)、雪に惑はされてぞおはしましける(雪道に難儀しながらお
見えになったのです)。

日ごろのつらさも紛れぬべきほどなれど(妹君は日頃の辛さも忘れるほどだったが)、対面した
まふべき心地もせず(何も無かったように対面なさって良いとも思えず)、思し嘆きたるさまの恥
づかしかりしを(姉君が不参を嘆いていらした事に気が引けていたものを)、やがて見直されたま
はずなりにしも(そのまま姉君のお考えが好転せず終わったのが)、今より後の御心改
まらむは(今さら匂宮が改心なさっても)、かひなかるべく思ひしみてものしたまへば(取り返し
がつかないと妹君が思い込んでいらっしやるので)、誰も誰もいみじうことわりを聞こえ知らせ
つつ(女房たちが入れ替わり立ち代わり、済んだことは仕方がなく、大事なのは是からなのだから
と、兵部卿宮と対面なさるように口濃く説得申し上げては)、物越しにてぞ(やっとな姫君を物越
しながら)、日ごろのおこたり尽きせずのたまふを(殿宮が日頃の不参の言い訳に止むを得ない宮
中事情を残らず仰るのを)、*つくづくと聞きあたまへる(ただじっと聞いていらっしやいました)。
*「つくづく」は<じっくり。しみじみ。>と集中しているさまをいう副詞語用もあるが、ただ<じっとして>いるだ
けの放心状態をいう形容の場合もあって、此处では後者だろう。

*これもいとあるかなきかにて(この妹君も命が有るか無いかという心細さで)、「後れたまふ
まじきにや(死に後れまいとお思いなのか)」と聞こゆる御けはひの心苦しさを(と思われる御気
配が懸念されて)、「うしろめたういみじ(非常に心配だ)」と、宮も思したり(と匂宮もお思いに
なって)、今日は、御身を捨てて、泊りたまひぬ(今日は御自分の立場を省みず宇治にお泊りな
さいました)。 *「これも」は注に<中君をさす。>とある。匂宮目線での言い方で、この部分も内心文括弧に含
めるべきなのだろう。でないと、厭にぞんざいな語り口に聞こえる。

「物越しならで」といたくわびたまへど(匂宮は物越しではなくお顔を見たいと切望なさった
が)、「今すこしものおぼゆるほどまではべらば」とのみ聞こえたまひて、つれなきを(姫君はも

う少し気持ちが落ち着きませんと応対もおぼつかないとだけお応えになって、つれない態度なのを)、中納言もけしき聞きたまひて(中納言もその様子を聞き知りなさって)、さるべき人召し出でて(妹君の側近女房を呼び出しなさって)、

「*御ありさまに違ひて(姫のお気持ちに反して)、心浅きやうなる*御もてなしの(薄情な兵部卿宮の御不参が)、*昔も今も心憂かりける月ごろの罪は(姉君にも妹君にも不満だったというこの二ヶ月の罪深さは)、さも思ひきこえたまひぬべきことなれど(そのように恨み申しなさって当然ですが)、憎からぬさまにこそ、*勘へたてまつりたまはめ(嫌われぬ程度に懲らしめ申しなさいませ)。かやうなること、まだ見知らぬ御心にて(匂宮は女から罰を受けるという事にまだ御経験が無いので)、苦しう思すらむ(困っておいででしょう)」 *「おおんありさま」の「御」は姫に対する尊称らしい。 *「おおんもてなし」の「御」は匂宮に対しての尊称。これらの主語判別は文意から確認するが、この語りをざっと聞いて主語が聞き取れる語感には私には無い。 *「昔も今も」は、故人を「昔」と言うようなので<姉君も妹君も>なのだろう。 *「勘ふ(かんがふ)」は<基準に照らして考える>であり、その基準に満たない事を<排除する。注意する。咎める。>でもあるらしい。

など、忍びて賢しがりたまへば(などと陰口で訳知り顔に解説なさるので)、いよいよこの君の御心も恥づかしくて、え聞こえたまはず(匂宮の来参を喜んでいる本心を見透かされて、ますます妹君は極まりが悪く、匂宮のお話しにお答え申しなされません)。

「*あさましく心憂くおはしけり(何も仰らないとは、あまりに情けない)。*聞こえしさまをも(頻繁には来られないが必ず大事にするとお誓い申した私の誠意を)、むげに忘れたまひけること(簡単にお忘れか)」 *「あさましく」は注に<以下「忘れたまひけること」まで、匂宮の詞。>とある。此処から「匂宮の詞」になるのは、私には分かり難い。この場面に入り込んでいれば、そういう流れも読み取れるのだろうか。そういうリズムやテンポ感は分からないでもないが、それはこの場面だけのもので、全体の話運びに即応感はない。 *「聞こえしさま」はこの物越しの話ではなく、八月末の彼岸明けに無理を押しして三日通いをした時の夫婦の契りなのだろう。

と、おろかならず嘆き暮らしたまへり(と匂宮は並々ならず嘆いてこの日を過ごされました)。

[第六段 匂宮と中の君、和歌を詠み交す]

夜のけしき、いとど陰しき風の音に(夜の空模様がいつそう陰しい風の音に)、人やりならず嘆き臥したまへるも(自分の不参で姫が塞ぎ込んでいらっしゃるのも)、さすがにて(そうは言っても察せられるので)、例の(そのまま無理も言えず)、もの隔てて聞こえたまふ(匂宮は物越しでお話し申しなさいませ)。

*千々の社をひきかけて(匂宮は多くの神々の名を挙げて)、行く先長きことを契りきこえたまふも(変わらぬ愛を誓い願い申しなさるも)、「いかでかく口馴れたまひけむ(厭に物言い慣れていらっしゃる)」と、心憂けれど(と姫には不審に聞こえたが)、よそにてつれなきほどの疎ましきよりはあはれに(離れていて相手にされない時の疎外感よりは近しきを実感できて)、人の心もたをやぎぬべき御さまを(都の女たちもしなをつくるという艶な匂宮を)、一方にもえ疎み果つまじかりけり(嫌う一方ではられません)。 *「ちぢのやしる」は<数多くの安らかに祭られた神々>で、「ひ

きかく」はく引き出して関連付ける>だから、いろいろな神々の名を挙げて願い誓う、のだろう。伊勢神・賀茂神・住吉神・春日神あたりはこの物語でも既に引かれているが、言い出せば八百万とあるらしいので限も無い。が、精霊が万物に宿るといふ神秘性とは違って、頭抜けた存在であるべき神はひとつの大きな柱で広い空間を護ってくれてこそ、傘下の人間は自由に動き回れるのであって、柱が数多くなれば堅牢さは増しても空間は狭くなって、有難味は薄くなる。無用の長物、船頭多し、とまでは言わなくても、対象がぼやけて御利益の有難味も然り乍ら、願主の真実味まで疑われる。

ただ(姫は静かに)、つくづくと聞きて(じっくりと匂宮の言葉を聞いて)、「ただつくづく」と、また「つくづく」が語用される。この「つくづく」もくじっとして>いる事には違いないだろうが、此処ではくじっくり>と匂宮の言葉を噛み締めた上でなければ、下の贈歌は詠めないだろう。だから、この「ただ」はくなんとなく>などではなく、匂宮の言葉を遊び慣れているとは思いながらも、それでもくじっと静かに受け止める>姫の姿勢を示しているのだろう。

「来し方を思ひ出づるもはかなきを、行く末かけてなに頼むらむ」(和歌 47-30)

「そうは言っても今までが、今までだったですからね」(意識 47-30)

と、ほのかにのたまふ(とぼっそり仰います)。なかなかいぶせう、心もとなし(匂宮は却って姫の不興を買ったかと不安になって)、

「行く末を短きものと思ひなば、目の前にだに背かざらなむ」(和歌 47-31)

「今までだったと言うのなら、今こそちゃんと聞いてくれ」(意識 47-31)

何事もいとかう見るほどなき世を(万事がこの姉君の俄かのご不幸のように長い目では見られない無常の世なのですから)、罪深くな思しないそ(悪い廻り合わせに捉われる罪深い考えはなさいますな)」

と、よろづにこしらへたまへど(といろいろ宥めなさいましたが)、「心地も悩ましくなむ(気分が悪いので)」とて入りたまひにけり(と姫は奥に入ってしまった)。)

人の見るらむもいと人悪ろくて、嘆き明かしたまふ(姫に突き放されたと女房たちに思われるのも体裁が悪いままに、匂宮は嘆き明かしなさいます)。恨みむもことわりなるほどなれど(姫が自分の不参を恨むのも当然だが)、あまりに人憎くもと(こうして訪ね参ったのに、あまりに邪険だと)、つらき涙の落つれば(辛い涙が落ちるので)、「ましていかに思ひつらむ(二ヶ月も放って置かれた姫はもっと辛かっただろう)」と、さまざまあはれに思し知らる(と、自分はその間に女遊びで紛らわせていたことを匂宮は情けなく思い知りなさいます)。

中納言の、主人方に住み馴れて(中納言が主人然として住み馴れて)、人びとやすらかに呼び使ひ(女房に気安く声を掛け)、人もあまたしても参らせなどしたまふを(大勢を使って持て成しの指図などなさるのを)、あはれにもをかしようも御覧ず(この人が宇治山荘の主人かと、しみじみとも一興とも匂宮はお思いになります)。いといたう瘦せ青みて(忌籠もりの中納言はそれはとて

も痩せて青白く)、ほれぼれしきまでものを思ひたれば(姉君の喪失感で呆然と物思いしているの
で)、心苦しと見たまひて(お気の毒にお思いなさって)、まめやかに訪らひたまふ(丁重に御弔問
申し上げなさいます)。

「ありしさまなど(姉君の生前の話など)、かひなきことなれど(言っても仕方がないが)、この
宮にこそは聞こえめ(この宮だけには話そう)」と思へど(と思つても)、うち出でむにつけても
(言い出すに)、いと心弱く(言い出せず)、かたくなしく見えたてまつらむに憚りて(愚かしく見
て頂き申すのが気が引けて)、言少ななり(薫君は言葉少なです)。

*音をのみ泣きて(声を上げて泣いてばかりいて)、日数経にければ(何日も経ったので)、顔変
はりのしたるも(顔が変わってしまったのも)、見苦しくはあらで(見苦しくはなく)、いよいよも
のきよげになまめいたるを(いっそう端然と風情があるのを)、「女ならば、かならず心移りなむ
(女なら誰でも心動かされるだろう)」と、おのがけしからぬ御心ならひに思しよるも(と匂宮は
自分の浮気性からして考えるのも)、なまうしろめたかりければ(妹君までその気になったらと、
なまじ心配になったので)、「いかで人のそしりも恨みをもはぶきて(何とか縁者の非難や不平を
避けかわして)、京に移ろはしてむ(京に移住させよう)」と思す(とお思いになります)。 *「ね
をのみなく」は「音を泣く(声を上げて泣く)」の強調。

かくつれなきものから(このように打ち解けないままながら)、内裏わたりにも聞こし召して、
いと悪しかるべきに思しわびて(帝にもお聞きあそばして、御不興だろうと思ひ悩んで)、今日は
帰らせたまひぬ(匂宮は今日はお帰りなさいます)。おろかならず言の葉を尽くしたまへど(匂宮
は姫を大事に思っていると言葉を尽くしなさいましたが)、つれなきは苦しきものと(無沙汰は辛い
と)、一節を思し知らせまほしくて(その事だけは思い知り頂きたくて)、心とけずなりぬ(姫は身
を任せずじまいでした)。

[第七段 歳暮に薫、宇治から帰京]

年暮れ方には(年の暮れには)、かからぬ所だに(こうした山里でなくても)、空のけしき例には
似ぬを(空模様は穏やかではないが)、荒れぬ日なく降り積む雪に(荒れぬ日もなく降り積もる雪
に)、うち眺めつつ明かし暮らしたまふ心地(嘆き暮らす薫君の心情は)、尽きせず夢のやうなり
(いつまでも溶けず長い夢を見ているようです)。宮よりも、御誦経など、こちたきまで訪らひき
こえたまふ(匂宮からも読経僧へのお布施など手厚く御見舞申しなさいます)。

「*かくてのみやは(こうしてばかりいては)、新しき年さへ嘆き過ぐさむ(新年まで泣き暮らす
事になってしまう)。*ここかしこにも(入道母宮や冷泉院に於かれても)、おぼつかなくて閉ぢ籠
もりたまへることを聞こえたまへば(無沙汰のまま閉じ籠りなさいしている事を不都合に申しなさ
るので)、今は(それでは)」とて帰らたまはむ心地も(と京へお帰りになるお気持ちも)、たとへ
む方なし(例えようもなく辛い)。 *「かくてのみやは」は薫君の内心文らしいので、「今は」までを内心文括
弧で校訂したい。 *「ここかしこにも」は下に「聞こえたまへば」と敬語遣いがあるので<入道母宮や冷泉院から>な
のだろう。

かくおはしならひて(このように中納言殿が忌籠もりなさって)、人しげかりつる名残なくならむを(人が多く居た山荘に、中納言殿が京へお帰りになると、皆残らず居なくなるのを)、思ひわぶる人びと(寂しがる女房たちは)、いみじかりし折のさしあたりて悲しかりし騒ぎよりも(大変だった姉君のご逝去に際して悲しんだ騒ぎよりも)、うち静まりていみじくおぼゆ(より静まり返って心細く思います)。

「時々、折ふし、をかしやかなるほどに聞こえ交はしたまひし年ごろよりも(時々季節柄に応じた風情に興じてお通いになって親しくなさっていたこの数年よりも)、かくのどやかにて過ぐしたまへる日ごろの御ありさまはひの(このように腰を落ち着けて過ごしなされたこのひと月ほどの中納言殿の御姿やお暮らしぶりが)、なつかしく情け深う(親しめて情け深く)、はかなきことにもまめなる方にも(風流ごとでも生活実務でも)、思ひやり多かる御心ばへを(行き届いていたご配慮を)、今は限りに見たてまつりさしつること(是を限りに見納め申し上げるとは)」

と、*おぼほれあへり(と皆思い沈み合っていました)。 *「おぼほる」は<覆い包まれる。溺れる。沈む。惚ける。>と古語辞典にある。発音は「おぼーる」に近いだろうから<ポーっとする>語感だろうか。

かの宮よりは(匂兵部卿宮からは)、「なほ、かう参り来ることもいと難きを思ひわびて(やはり宇治山荘への来参はとても難しいと思ひ悩んで)、近う渡いたてまつるべきことをなむ(近くにお渡り頂く事を)、たばかり出でたる(算段しました)」と聞こえたまへり(とお手紙で申して来なさいました)。

後の宮、聞こし召しつけて(母君の中宮が宇治姫の事をお聞き知りなさり)、

「中納言もかくおろかならず思ひほれてあたるは(中納言もそれほどにただならず思い呆けて忌籠もりして居たということは)、げに(なるほどその妹君であってみれば)、おしなべて思ひがたうこそは(宇治姫は軽々しい身分の者とは見做し難いと)、*誰も思さるらめ(誰もがお思いなのだろう)」と、*心苦しがりたまひて(と特に配慮なさって)、 *「たれもおぼさるらめ」は敬語遣いなので、中宮が気を遣うべき王家筋や重臣たちの評判なのだろう。 *「こころぐるし」は<気詰まりだ。気の毒だ。>という語用が多いようだが、そう感じて<苦心して善後策を練る>ということでもあるのだろう。でないと、「がる」の努力姿勢に対する評価を求める中宮の意図が説明できない。

「二条院の西の対に渡いたまで(二条院の西の対に姫をお移しなさって)、時々も通ひたまふべく(時々お通いなさるるように)、忍びて聞こえたまひけるは(内々にお話しなされたのは)、女一の宮の*御方にことよせて思しなるにや(女一の宮の御社中という口実をお考えになつてのことらしい)」 *「おおんかたにことよせて」は注に<匂宮の推測。「御方にことよせて」とは、女房としての意。『集成』は「明石の中宮は、前にこのような趣旨のことを意見しているが、匂宮にとっては、かりそめにも女房扱いは、不本意なことである」と注す。>とある。ただし、源氏殿の六姫との結婚は政略上必須だったらしく、女一の宮の高級女房は最も攻撃を受け難い安全な地位であったのかもしれない。

と思しながら(と匂宮は宇治姫を女房待遇するのは不本意にお思いながら)、おぼつかなかるまじきはうれしくて(会えないことがなくなるのは嬉しくて)、のたまふなりけり(この話を宇治姫に仰ったようです)。

「さななり(そういうことになったらしい)」と、中納言も聞きたまひて(と妹君の上京を中納言もお聞きになって)、

「三条宮も造り果てて、渡いたてまつらむことを思ひしものを(三条宮邸も建て直しが済んで、姉君をお渡し頂き申そうと思っていたものを)。かの御代りになずらへて見るべかりけるを(姉君の代わりに見立てて妹君を娶る事も出来たものを)」

など、ひき返し心細し(など思い返せば空しい)。宮の思し寄るめりし筋は(匂宮が疑いを持ったらしい妹君との結婚話は)、いと似げなきことに思ひ離れて(まったく自分らしくないと気持ちが離れて)、「*おほかたの御後見は(山荘の後片付けは)、我ならでは、また誰かは(私の役目だろうか)」と、思すとや(とお思いだろうか)。 *「おほかたのおおんうしろみ」は注に<『集成』は「そのほかの(夫婦としてではない)大抵のお世話」と注す。>とある。が、生活の面倒を見るのが結婚だろうから、それ以外、といっても何のことか私には分からない。結びの文が当て推量とは我ながら不本意だ。

(2013年6月12日、読了)